

#### 4. 佐賀家漁場の経営

佐賀家漁場の生産高に関しては、明治26年(1893)までの内容はまだ明確ではありませんが、明治26年以降の生産高は残存する書類から伺うことができます。

明治26年からの生産高は、毎年、激しく変動しています。これは、ニシン漁がいかにか不安定なものであったかを物語っています。



佐賀家に残された漁場経営関係書類

不安定なニシン漁の経営リスク(※83)を少しでも軽減

するために、漁場貸しをするようになります。

定置漁業の権利を貸すことで、貸賃または漁獲物を得たのです。

佐賀家が初めて漁場を貸したのは明治37年(1904)のことで、行成網を福原宗太郎に貸賃10石(※84)、井口乙二郎に貸賃50石で貸しました。

その後は、元場の3統の経営を除いて、全て漁場貸しを行っています。

昭和の不漁期に入ってから、佐賀家漁場では、このようにリスクを回避することで、経営が成り立ったのです。

#### ※83 リスク

何が起るかわからないこと。不確実性。

#### ※84 石

体積の単位で、ニシンの場合は1石=約750Kg。

なお、昭和に入ると、佐賀家漁場の経営は十代清太郎

からその息子の十一代伊四郎に引き継がれ、留萌のニシン

漁場については伊四郎の弟である潤二郎が経営していま

した。

しかし、潤二郎が早く亡くなったことから、伊四郎の

二女の婿清志が後を継ぎ、昭和 32 年(1957)まで続けまし

た。



佐賀家漁場の船着き場



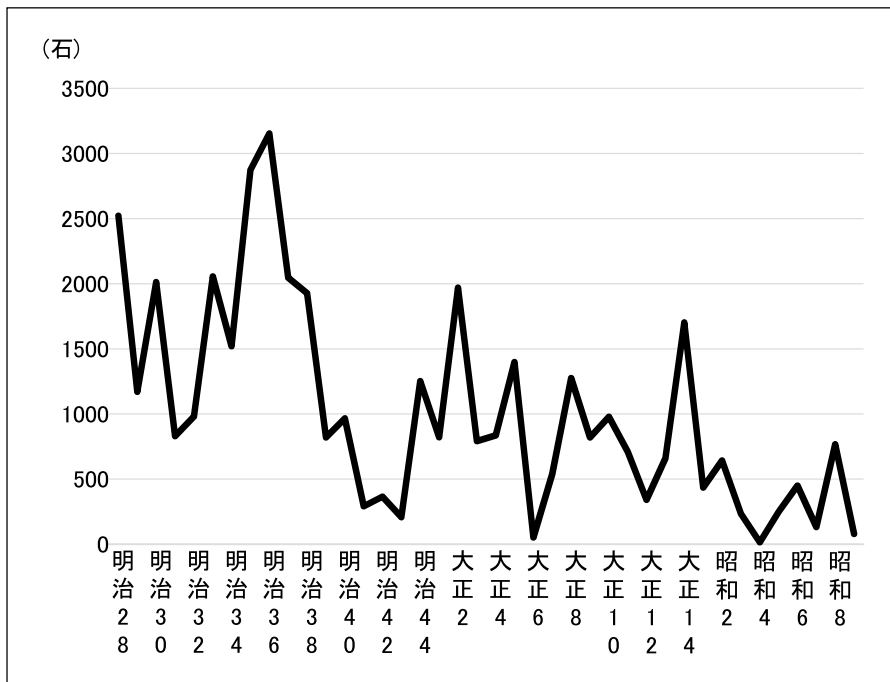
晩年ほんねんの佐賀清太郎せいたろうふさい夫妻



十一代じゅういちだい佐賀伊四郎いしろう

佐賀家は、<sup>こうか</sup>弘化元年(1844)から昭和32年(1957)まで、<sup>はち</sup>八  
<sup>だいへいのじょう</sup>代平之丞から<sup>じゅういちだいしろう</sup>十一代伊四郎までの<sup>よんだい</sup>四代113年間にわたり、  
<sup>ぎよば</sup>礼受のこの漁場で<sup>りょう</sup>ニシン<sup>いとな</sup>漁を営んだこととなります。

○<sup>ぎよば</sup>佐賀家漁場における<sup>せいさんだか</sup>生産高の推移<sup>めいじ</sup>(明治28年～昭和8年)



ぎよば せいさんぶつべつ せいさんだか  
 ○佐賀家漁場における生産物別の生産高

品名	せいさんだか 生産高（石）	
	めいじ 明治28年	昭和8年
みが 身欠きニシン	31.6	97.6
どうにしん 胴練	52.5	12.4
数の子	9.7	19.2
ささめ 笹目	9.1	14.4
白子	9.4	4.8
ニシン <small>かす</small> 粕	2,412.6	529.8
ニシン油	1.0	0.5
生ニシン	—	181.0
うるこ 鱗	—	5.4
合計	2,525.9	865.1